

# ヴィブラート

角 圭司

ヴィブラートは、特定の音に揺らぎを与えることを指します。演奏では、歌いたい箇所にヴィブラートをかけたりしていきますが、音1つ1つの単位でみると、特定の音に艶を加えたいとき、あるいは、音の広がり表現したいときなどに用いることが多いと思います。

動作としては、腕を弦の方向に沿って高速で往復し、指先で弦を伸び縮みさせて音の高低を変化させて揺らぎを与えます。この動作がスムーズにいかなければ綺麗な音の揺らぎを作り出すことが難しくなります。

では、具体的に練習をしてみましょう。

ここの譜例では3弦の7フレットのレの音を例にして挙げます(譜例08-1 abc)。これはただ単にヴィブラートを掛けるやすい弦とポジションで例としているだけです。実際に練習する場合はどの弦のどのポジションでも構いません。

譜例の音符の上に矢印を記しています。矢印が上を向いている拍では音のピッチが上がるように(腕・指をローポジション方向へ移動)、反対に矢印が下を向いている拍では音のピッチが下がるように腕・指をハ

イポジション方向に動作させます。

最初に、譜例08-1aのように、4分音符の間隔で動作をして一定の速度で音の揺らぎを作ってみましょう。その次に譜例08-1b、譜例08-1cへと進んでください。

この練習をするときの注意点は、動きの大小がバラバラにならないようにして常に同じ度合のピッチの揺らぎにすること。それから、そのためには、押さえている指が弦上を滑らないようにして、弦上での動きにロスが出ないようにすることです。

これは、ヴィブラートの基本的な練習ですが、実際に曲を演奏する上では、撥弦した直後にヴィブラートを掛けるのが良いかどうかはその時々によると思います。というのも、ギターの場合は、撥弦した瞬間から音が減衰し始めます。右手の弾き方や楽器にもよりますが、ヴィブラートを掛けることによって音の減衰が早まる場合もあります。ですから、ヴィブラートを掛ける箇所というのも考慮していく必要はあると思われます。ただ、そうは言っても、ヴィブラートを使用することによって表現の幅は確実に広がります。

譜例 08-1 08-1 abc

